



「明細短冊」に、

拜領屋舖京橋弓町南横町四百四坪壹合五勺右住宅」同所北側東木戸際より三軒目坪數百貳拾坪貸地ニ仕置候と記すのがその地所である。

観世宗家に伝わる記録の中に、観世清之氏の手びかえの、屋敷絵図があつ

### 昔の観世屋敷

徳川幕府から観世太夫が拝領していた屋敷は、江戸と京都とにあつて、江戸は京橋南二丁目、五百貳拾四坪壹合五勺、京都は大宮通糸屋丁に壹千百坪という豪勢なものだった。

京橋は弓町で、屋敷の前の道を観世新道と呼んでいた。亡くなった観世清之の手扣の絵図面には、京橋銀座壹丁目新道、新両替町通字観世新道と書いている。銀座に金春の名が残っているのも同じ理由による。神田猿樂町も、慶長の昔祖先の黒雪齋が、家康から屋敷を拝領したための名称ということである。

清之の絵図面によると、南の通に面し、すなわち辰己に表門があり、門を入って右手が舞台になっている。

すなわち屋敷の中央左寄に能舞台があるわけだ。白洲が非常に広く、やく三間幅のものが、正面とワキ正面にと

て、左近氏の前記隨筆に、その紹介が為されている。銀座資料として見逃がせないものでありながら、あまり知られていないので、許諾を請うて、その一文をここに転載させて頂くこととした。

### 故観世左近

ってあり、正面上の間は七尺の床間附拾參疊、次の間拾五疊。ワキ正面白洲の向方は、拾八疊の御使者の間に、拾貳疊の次の間があり、この次の間には五疊の長持置場が附いている。

地裏には御簾中拾八疊の間、その右手すなわち、舞台の、切戸口と板椽つづきに六疊の草焙場、その後は廊下で両便所があり、御簾中の間の左手は、廊下を隔てて一足稻荷社の土蔵がある。舞台の裏は一間幅の後座廊下があつて、かなり広い内庭に面し、そこには燈籠や庭石や井戸があり、牡丹花壇、植木棚、水鳥池などがある。

庭の向が仏間（六疊）、納戸（拾貳疊）、茶の間（拾貳疊）と続いた棟があり、この左手に土蔵、右につながつて女中詰所、奥台所、湯殿、女中部屋などがあり、その先には土蔵があり、裏門となつている。

裏門は弓町新道通であり、鏡の間の後方、内庭に面して拾五疊床の間附の御装束の間があり、その左と後に、長四疊の次の間が二間と台所とがつづいている。

表門の脇に門番所、その隣に用人延命太郎兵衛宅、その後は土蔵、その横は貸地で、路次があつて長屋が二棟、その先は清甚作拜領屋敷がある。この長屋に、有名な力士の鬼面山がいたよしを聞いている。

門を入つて右には供侍所があり、玄関は貳台を上つて拾貳疊、右に四疊の間、左に六疊の内玄関があり、ここに玄關番と用人とが机が並べている。玄関の後カギの手に廊下があり、右側は四疊半と二階への階段下の戸棚、左側は戸棚附の九疊の御弟子部屋、その左が参疊の御掛部屋、廊下の右手が鏡の間、左手が拾五疊の仕度所、その後が物置と四疊半の男部屋とが附いている。土蔵は三棟、井戸は三本ある。

以上で想像されるように、旧幕時代の観世太夫は大世帯だった。祖母（二十三世清孝室）の話には、自分が観世家へ嫁入して来た時は奥女中だけでも七人いたんですよ、とのことだった。

観世宗家が弓町に拝領屋敷を得た年月日は、観世家にも残っていないそう

であるが、すでに『天和元年』（一六八一）の武鑑に、弓丁、観世太夫として載るのを見れば、その賜地は遠く江戸初期に遡る。

ひとり観世家のみではなかった。銀座地区に屋敷を拝領していた御用商人や御能役者は意外に多い。よつて、正徳三年（一七一三）版武鑑からそれらの人々を書き抜いてここに附載しておくこととする。これもまた銀座地区の過去を物語る有力な資料だからである。

- ▲銀座
  - 江戸京橋南一丁目 中村 内蔵助
  - 京橋南一丁目 後藤四郎三郎
  - ▲常是包所
  - 京はし南二丁目 関 久右衛門
  - ▲朱座
  - 江戸竹川丁 下村 道清
  - 江戸同丁 下村甚右衛門
  - ▲御とぎ屋
  - 新面替一丁メ 角野 寿見
  - ▲御蔭絵師並塗師
  - 京はし一丁メ 梅原七郎右衛門
  - ▲御書物所
  - 京橋一丁メ 書林八右衛門
  - ▲御鉄炮師
  - 京はし四丁メ 松屋弥左衛門
  - 京はし四丁メ 榎並勘左衛門
  - ▲御刷毛師

京橋南一丁目	刷毛屋善右衛門	くわんせやしき太鼓 観世	左吉
▲御観師	武右衛門	新両替四丁目 小 幸	清次郎
弓丁		おわり丁一丁目 大 福王	半 介
▲御鞆師		観世ヤシキ	ツレ山本 又三郎
京はし一丁目	丸橋喜左衛門	南なベ丁	ツレ日吉 十五郎
▲御筆人		南なベ丁二丁目 ツレ 弥石八郎左衛門	
京橋西かへ丁	平井 因幡	おわり丁二丁目 ツレ 梅若 甚兵衛	
▲御太鼓台師		観世ヤシキ	地頭日吉 重兵衛
京橋二丁目	榑 五郎兵衛	新両かへ四丁目 地頭 梅若助右衛門	
▲御糸屋		南なへ丁	地 日吉 市重郎
京はし南三丁目	瓶子や忠兵衛	観世ヤシキ	同 弥石 伝之丞
▲御紺屋		南なへ丁二丁目 同 梅若半右衛門	
京橋つめ	土屋五郎右衛門	京橋南一丁目 同 服部作右衛門	
▲御箔屋		観世ヤシキ	同 日吉 小平次
新両替四丁目	箔屋 嘉兵衛	保生座組合	
卅間堀	箔や 与兵衛	京橋四丁目 笛 一噌 又 六	
▲御絵具屋所		山王丁	太夫 金春八左衛門
新両かへ四丁目	絵具や五兵衛	京橋二丁目	ワキ春藤 源 七
▲御畳屋		京橋二丁目	ワキ春藤 又 七
京橋南一丁目	中村 弥太夫	新両かへ丁	ツレ春日四郎三郎
▲御時計師		山下丁	狂言大藏 弥右衛門
京橋弓丁	時計理右衛門	山下丁	狂言大藏 長太夫
▲御日影時計師		山下丁	狂言大藏 長太夫
京はし南二丁目	中根 丹五郎	金剛座組合	
▲御能役者衆		たき山丁	太夫 金剛 新 六
▲御世座組合		同所	ワキ 高安 彦太郎
京橋南二丁目	太夫 観世 織 部	たき山丁	太鼓 高安七郎兵衛
織部子上同所	観世 三重郎	喜多座組合	
西こんや丁	ワキ 福王 茂右衛門	京橋四丁目	ツレ 岩崎 長太夫
京はし南二丁目	太鼓 葛野市郎兵衛	京橋六丁目	ツレ 福井 惣兵衛

弓丁	地 小山 喜兵衛	竹川丁	同 中野甚右衛門
京橋二丁目	同 今村市郎兵衛	御用人役者触衆	
弓丁ヨコ	同 池田平左衛門	京橋四丁目	松井喜右衛門
京橋二丁目	同 村岡善右衛門		

### 山室軍平と、築地・銀座

原 田 弘

「サーベーション、アミー」を尾崎行雄は「救世軍」と訳した。岡山の人、山室軍平が築地活版製造所で、日給八銭の職工として働くことになったのは、明治十九年八月、彼十四才の時であった。

築地活版の地は、中央区築地一丁目十二番地懇話ビルの処で、今「活字発祥の碑」が建てられている。

彼にキリスト教の芽をあたえたのは彼が入所した翌年、明治二十年十一月活版所の、築地川一現高速道路一号线をはさんで反対側、祝橋西詰め、八重洲興行ビルのある、銀座三丁目十四番地先路上での、キリスト教布教であった。

この頃、ここはちょうど厚生館という大会堂があり、各種集會に利用されており、山室の上京前年の十八年十一月には、全国キリスト教牧師長老大会が催されたのもここであった。

彼の入所した頃の築地活版所は、社長、平野富二、支配人曲田茂、所員も男女合せて一七五名の大世帯で、当時としては府内屈指の大会社であったといわれていた。

山室は間もなく、下宿を本湊町、現湊町一丁目、近くに鉄砲洲神社があった地へ引移った。ここは木造二階建て十畳の間を月五十銭で借りたが、この家は風紀上好ましくない家業をしていた。

彼が教会へかよう様になったのは、先の伝導に心を打たれからであったが新富町にあった福音教会系の築地教会で、アメリカのペンシルベニヤ州のドイツ系移民の間で建てられた、メソジスト系教会で、明治九年日本での伝導を開始した(山室軍平、三吉明)もので、洗礼は簡単には許されなかったが明治二十一年七月、ようやく念願かなって洗礼をうけ、築地福音教会会員のメンバーとなることができた。

この時の牧師は、高野文三で、太平

洋戦争で南海に散った、連合艦隊司令長官山本五十六元帥の実兄であったとのことである。

築地活版所を満二年でやめ、下宿も八丁堀松屋町の、村上辰次郎という元憲兵でクリスチャンの家に下宿し、日本聖書神学校の前身であった、福音教会の伝道学校に通うことになった。学校は、軽子橋、現在の築地三丁目武蔵野マンション付近にあったもの。

救世軍が日本に上陸したのは、これから数年の後、明治二十八年九月、その本営は新富町二丁目四ノ六、当時の新富町六丁目十一番の地に置かれた。ちょうど、新富座―現中央税務事務所の前あたりに当る。

当時の建物は、元新富座の芝居茶屋であったもので、間口二間、木造二階建て、各階に一夫婦の土官が住み、階下六畳を本営事務所とした。これが日本最初の救世軍本営である。

また、司令官は、新栄町五丁目（現入舟町三丁目）に家を借りて住んだのである。

日本最初の救世軍集会は、同年九月二十二日神田美土代町で行なわれた。

山室軍平が救世軍に入隊したのは、明治二十八年十二月一日、救世軍が日本に上陸してわずか三カ月後のことである。彼の二十三才の時であった。

翌二十九年一月には中尉に昇進、士官養成所付になったのを見ても、ずいぶん早い出世と思われるし、如何に有能な人物であったが推察される。

明治三十一年三月、本営は南佐久間町に、二年後の三十三年六月には、京橋区南金六町―芝口二丁目、当時の新橋駅横、現在新橋一丁目、新橋交叉点の汐留寄りの処に移った。

銀座に本営が移されたのは、日露戦争終了後の明治三十九年十一月、銀座二丁目十一番地、今の二丁目七番地一八号、名鉄メルサのある処で、毎日新聞創立期に大なる功勞のあった、岸田吟香の楽善堂の家である。

（岸田劉生は、吟香五十八才、母勝子三十六才の時の子で、四男として生れ、卯年生れなので中国趣味の吟香は彼に劉生と名づけたのである。）

銀座本営の時期は最もめざましい活躍を開始したのである。すなわち、翌年、救世軍創設者ウィリアム、ブース大将の来日は、救世軍と、その活動を世人に大きく知らせることになった。続いて、吉原遊廓などに対する娼妓解放、人身売買禁止などの積極的運動を身の危険を顧みず行い、生活相談の窓口を設けた。

それに、年末貧民窟に対して慰問籠配布。これが後に「救世軍慈善鍋」。

そして、今、毎年歳末に銀座・新宿などで見られる「社会鍋」へと発展して行くことになるのである。

慰問籠は、蜜柑籠の中に、手拭・足袋・パン・菓子・玩具・絵本、又は、餅・米・麦などを入れ、これが大八車に積まれ、鮫ヶ橋など当時の市内貧民街の要保護家庭一千戸に配布されたのである。

これを側面から積極的に支援したのは「東京毎日新聞社」。この新聞社は今の銀座五丁目八番ノ一、銀座四丁目交叉点角、ライオンの日産ショールームの地にあり、島田三郎は常に救世軍の深い理解者として、協力を惜しまなかった。なお、この毎日新聞は、現在の毎日新聞とは別で、現在の「毎日新聞」は、当時「東京日々新聞」として銀座五丁目みゆき通りと、銀座通りの角にあった。

明治四十二年暮、慈善鍋は「社会鍋」として街道に進出、貧しい人々のために募金活動を行うようになった。

この銀座時代、山室中佐はこれまで苦業を共にした機恵子夫人を病気でなくした。夫人は常に積極的に要保護婦女子の救済にあたり、特に築地三丁目十一番、現二丁目十五番地には、救世軍による「婦人救済所」が設けられ、婦女子の収容と更生のため、夫人は責

任者「臨時勸業婦救済所長」として活躍したことは高く評価されている。

山室軍平は、翌大正六年十一月一日本営からわずか一五〇メートルしか離れていない銀座教会で、内村鑑三等の祝福を受け、水野ゑい少校と再婚している。

大正八年、銀座本営は、神田に新たな中央会館落成と共に引移った。銀座本営は、十四年銀座通りに置かれていたのである。

その後、ここは小供屋玩具店、服部時計店、石丸毛織物屋などの店になり震災後、前記玩具店は安田仏具店となり、石丸、服部各店はそのままおかれていた。

（筆者、郷土史研究家）

### 催し物のお知らせ

#### ◆東京を語る会 第14回

日時 昭和五十年二月十五日（土）

午後二時～四時

演題 隅田川に関する新説

講師 郷土史家 豊島寛彰先生

◆ ◆ ◆